

国にたてついた

一労働者の想い出



く国鉄分割民営化から三十年く

はじめに

一九八七年二月十六日、通常の車掌業務を終え事務所にもどったところ現場長から「あなたはJR九州からの採用通知がありませんでした」紙切れ一枚もなく口頭で通告。その三年後、一九九〇年四月一日、全国一〇四七名の一人として解雇されました。その後、二十四年の闘いの末、政治的和解で終結しましたが、既に六十六名の仲間は解決をみることなく他界されていきました。

今年二〇一八年は分割民営化から三一年目です。この間、特に印象に残っていることがあり、ペンをとりました。遅まきながらこれまでご支援いただいた全国の労働諸団体、民主団体、各メディア、各政党、自治体のみなさまに感謝を申し上げます。

焼身自殺でも

「馬場園さん、国会前でガソリンをかぶったらどうな」解雇された宮崎斗争団（十七名）の毎月一回会議をしてきた中で仲間から出た言葉でした。……というのも、長い間あらゆる斗いを展開（労働委員会、裁判等）をやってきたにもかかわらず仲々先が見えない、解決の糸口、光が見えない状況のもとお互いのイライラから出た言葉だったのです。

一九七〇年代ベトナムに対するアメリカの侵略に抗議し僧侶が焼身自殺した事件があり、世界を驚かせたことで平和解決が早まった過去を思い出しました。

